青山地球社会共生論集 4 号，2020 年 2 月

【論　説】

時間の政治社会学

――近代的クロック・タイムから収縮／断片化した時間へ――

高　橋　良　輔

たとえば、自分の乗るべき汽車に遅れまいと走っている男は、自分に残された時間を非常に短いと思うが、走ることから来る疲労は、走っている時間を長く感じさせる。彼は時間を追いかける…（中略）…彼の努力の原因は短すぎる時間であり、結果は長すぎる時間なのだ…（中略）…彼は時間を、ある時にはすでになした努力（疲労）によって測り、ある時にはさらになされねばならぬ努力によって測るとも言えるだろう。すでに消費された仕事、さらに消費すべき仕事。

一方は状態、他方は観念、という対比。

人は正確な交換の定常態（レジーム）から遠ざかる。

走破された道が、走破すべき道に影響を及ぼす。

（ポール・ヴァレリー「長く感じられる時間と短く感じられる時間」）

はじめに…… 2
1．社会的時間から時間政治へ…… 2
2．7 月危機をめぐる時間政治 …… 5
3．戦後世界と時政学…… 8
4．世界秩序の時間論的転回…… 10
5．収縮／断片化する時間地平…… 13
6．時間統治の行方…… 15

© Aoyama Gakuin University Society of Global Studies and Collaboration, 2020

むすびにかえて…… 17
参考文献…… 17

はじめに

約 100 年前、物理学者のアルベルト・アインシュタインは一般相対性理論によって重力が空間を歪ませ、観察者の位置と速度によって時間の進み方も変化すると予言した。それ以降、わたしたちが時計で測定する物理的時間――クロック・タイム――さえも、もはや均質で安定したものとは考えられてはいない。むしろ今日、人々の生活の鋳型となる時間フレームと社会活動を調整する時間決定の条件は、グローバリゼーションの臨界点で急速に変容しつつある。

そこで本稿では、まず第 1 節で 20 世紀初頭の文学・哲学から近代的な時間意識のあり方を抽出し、社会学者ノルベルト・エリアスに依拠して時間フレームと時間決定という二つの観点を提示する。これを受けて第 2 節では、第一次世界大戦の幕開けとなった 7 月危機を取り上げ、そこに近代的なクロック・タイムにもとづく時間フレーム／時間決定の尖鋭化を見出してみたい。また第 3 節では、永井陽之助やポール・ヴィリリオなど戦後世界で検討された時政学の射程を示したのち、第 4 節でウェストファリア体制を一つの時間秩序とみなして、冷戦後の歴史的時間の復権を浮かび上がらせる。第 5 節ではグローバリゼーションの進行とともに収縮／断片化する時間の位相を検討したうえで、第 6 節で時間統治の行方を考察していく。むすびでは、これらの第一次世界大戦から現在までの時間変容を振り返ることで、時間の政治社会学の地平を展望してみたい。

近代的な時間フレームと時間決定を前提にしてきた政治社会学の思考法は、いまやグローバリゼーションがもたらす時間条件の変容とともに、あらためて問い直されねばならないのである。

1．社会的時間から時間政治へ

⑴　時間フレームと位置確認

2016 年公開のアニメーション映画『君の名は』には、時間について印象深いセリフがでてくる。「よりあつまって形を作り、捻れて絡まって、時には戻って、途切れ、またつながり。それが組紐。それが時間[1]」。なるほど日常生活のなかで、わたしたちは時間の流れ（duration）を必ずしも安定した一方通行のものとして経験しているとは言えない。同窓会で久しぶりに友人に会うとき、人々は一瞬にして数十年前の人間関係に引き戻される。また新たなプロジェクトに着手する際には、まだ存在しない数年後の事態を先取りせねばならない。時間は人々の活動に欠かせない参照枠組みでありながら、過去／現在／未来といった基本的なシークエンスでさえもしばしば混淆し、たがいに侵犯しあっている。

こうした社会的時間の非線形性は、すでに 20 世紀初頭には文学上の一大テーマとなっていた。作家マルセル・プルーストは、『失われた時をもとめて』の冒頭で、それを次のように表現する。

> 眠っている人間は自分のまわりに、時間の糸、歳月とさまざまな世界の秩序を、ぐるりとまきつけている。目覚めると、人は本能的にそれに問いかけて、自分の占めている地上の場所、目覚めまでに流れた時間を、たちまちにそこに読み取るものだが、しかし糸や秩序はときに順番が混乱し、ぷつんと切れることもある。（プルースト　1996：24）

プルーストにとって、人間は歳月と世界という二つの座標軸で自らを位置づける存在であった。彼は、空間のなかで人間に割り当てられた場所がごく狭いのに対して、時間のなかで人間が占める位置はむしろ広大だと考える。「人間はまた歳月のなかにはまりこんだ巨人族のようなもので、同時にさまざまな時期にふれており……人間の占める場所は逆にどこまでも際限なく伸

びているのだ――（時）のなかに（プルースト　2001：235）」。

なるほど社会学者ノルベルト・エリアスによれば、時間とはなによりもまず人間の位置確認の手段であった[2]。彼は、時間表象は何世代にもわたる長い学習プロセスの経験を通して開発されたものであり、哲学者イマニュエル・カントが素朴に前提にした先験的な概念などではないと批判する[3]。例えば農耕社会では、人々の活動の前提となる時間フレームは太陽の動きや季節の移り変わりと連動する。人々は日の出とともに働き、日没とともに休む。作物の種まきや収穫を成功させるには、それぞれに適切な季節を見極めなければならない。またチャールズ・チャップリンの映画『モダン・タイムス』は、工業化社会の時間フレームが機械のテンポと同期していくことを浮かび上がらせた。人々の生活の基盤であり鋳型――マトリックス matrix――となる時間フレームは、先験的であるどころか、各社会の特性や規模、発展段階によって極めて多様でありうる[4]。

もちろん、この時間フレームは日時計から水時計を経て機械時計にいたる計測手段の技術的向上――脱自然化――とともに変化してきた。だが『時刻の歴史――時計と近代的時間秩序』でゲルハルト・ドールン - ファン・ロッスムが描くように、時間フレームはその社会の主要な生活様式を映し出さずにはおかない[5]。中世社会において修道院の聖務日課を枠づけた「教会の時間」と近代社会で商人たちの交易を枠づけた「商人の時間」は、主要な社会勢力の交代を反映していた。この意味では、時間フレームは決して中立的でも普遍的でもなく、きわめて政治的に構築される社会秩序のひとつである。古代ローマにおける改暦から現代日本における元号まで、暦やカレンダーの編成はいつも権力や権威の変動と結びついている。また 1884 年の第 1 回子午線会議でイギリスのグリニッジ子午線が経度 0 度 0 分 0 秒と認められ、その平均太陽時が国際的な基準時刻とされたのは決して偶然ではない。それは明らかに「太陽の沈まない帝国」の覇権に裏付けられた時間フレームであった。「すべての時間は社会的時間である（アダム　1997：71）」とすれば、時間フレームは政治的に構築されて人々の生活を枠づけていくのである。

⑵　時間決定による行動調整

こうして社会生活のマトリックスとなる時間フレームの政治性を認めるならば、時間それ自体の調整や編成もまたきわめて人為的な営みである。このことをいち早くテーマ化したのは、やはり 20 世紀初頭の文学であった。1924 年に発表された『魔の山』で、トーマス・マンは時間について次のように記している。

私たちが「退屈」と呼んでいる現象は、ほんとうはむしろ生活の単調による時間の病的な短縮であって、大きな時間量が単調な生活の連続のために血がこおる思いがするほど収縮してしまうことである…（中略）…私たちは生活へ新しい違った習慣をはさむことが、生命をつづかせ、時間感覚を新鮮にし、時間感得を若返らせ、強め、ゆっくりとさせ、それによって生活感情そのものを若返らせるただ一つの手段であることを知っている。（マン 1988：184）

プルーストが時間フレームの中に人間を位置づけたのとは異なり、ここでは時間は人間の関心や行動によって変化する。すでに 1884 年には、アンリ・ベルグソンが時間を等質的な環境とみなしたカントを批判し、「流れる時間」は意識に直接与えられると主張していた[6]。またマルティン・ハイデッガーは、1927 年の『存在と時間』で人間（現存在）の実存の根拠を時間性（Zeitlichkeit）に求めている。彼によれば、「死へと臨む存在」である人間は自分を未来に向けて投企するとともに、過去の経験を現在のもとに把持しなくてはならない[7]。マン、ベルグソン、ハイデッガーにとって、人間はただ時間フレームのなかに埋め込まれているだけの存在ではなく、むしろその関心によって時間を伸縮させ、自らの生き方を方向づけていくのである。

このためエリアスによれば、時間には社会的な位置確認機能のみならず、社会的な調整機能が備わっている[8]。「われわれはどこにいるのか？」という位置確認が時間フレーム＝時間の持続（duration）を浮かび上がらせるの

に対して、「われわれはそれをいつするのか？」という時間決定は時間の調整（timing）に注意を向けさせる。このとき時間は、生活の鋳型であるだけでなく、人間が活用するべき資源となる。わたしたちは時間を合わせて友人と会い、寝る間を惜しんで時間を作り、ときに時間を無駄に費やす。その際、重要なことは時間の流れのどこに断層線を入れるかというタイミングの決定にほかならない。

例えばライフコースやアクションプランの設定は、わたしたちが時間をみずから分節化することを意味する。ブザーやベル、時間表、工程表、締切りといったデバイスは、社会生活を規格化し、優先順位や選択の基準を提供してきた。このとき時間は、活動に割り当てられ、売買され、管理される。すなわち時間決定は、稀少価値である時間をいかに創りだし、配分し、使用するかという政治的決定となる。「社会的実践において時間決定の問題はますます重要な役割を演じている。しかし社会理論においては時間決定問題はほとんど注目されていない（エリアス　1996：91）」。つまり「時間を決める」ことは、自分と他者の行動を時間によって統制することを意味しているのである。

さらに過去、現在、未来といったシークエンスは、単なる時間の量的蓄積ではなく、「いま、ここ」での決定の方向づけ（orientation）にも利用されてきた。わたしたちは過去から学び、未来に向けて決断する。なるほど保守主義者エドマンド・バークは「我々の一切の保有物を先祖からの相続財産として引き出す」ように勧め[9]、マックス・ヴェーバーは政治家の倫理を将来に対する責任に見出して心情倫理と責任倫理の緊張関係を注視した[10]。そこでは消え去った過去やまだ存在しない未来が、現在の決定の根拠として引用される。

もちろん、時間をめぐるこれら二つの捉え方――生活が流しこまれる「鋳型」としての時間と、活動のために利用される「資源」――のあいだには埋めがたい溝がある[11]。だが実のところ、時間をたった一つの様相に押し込める必要はない。かつて古代ギリシアでは、時間をめぐる二柱の神が概念化されていた。一方のクロノスは、過去から未来へと流れる連続した時間をつか

さどる。それは当時の時間フレーム＝時間の流れ（duration）を表わしていた。他方でカイロスは、前髪は長いが後頭部が禿げた美少年の姿として描かれる。好機はすぐにとらえなければ逃れ去ってしまい、後ろ髪を掴むことはできない。この神は一瞬の機会や主観的な時間体験をつかさどり、時間決定＝時間の調整（timing）と結びつく。いわば人間は、時間の流れのなかに自らを位置づけつつ、同時にまたそれを伸縮させたり切断したりして時間を決定する。ここに至って時間フレームと時間決定という二つの局面は、社会的時間の抽出から時間政治――「時間のなかでの政治　Politics in Time」と「時間をめぐる政治 Politics of Time」――の省察へとわたしたちを促すのである。

２．７月危機をめぐる時間政治

⑴　時間フレームとしての戦争計画

それでは、こうした時間政治の分析はいかに可能だろうか。マルセル・プルーストやトーマス・マンの同時代経験の一つは、言うまでもなく第一次世界大戦であった。その原因をめぐっては、複雑な同盟関係や列強各国のナショナリズム、グローバルな地政学と世界経済等、その終結から 100 年を経た今日も議論が続いている。しかし、世界大戦への扉を押し開けた 1914 年の 7 月危機は、各国軍部が自らを拘束した戦争計画と電信・電話の普及による外交ペースの変化によって特徴づけることができる。

例えば『8 月の砲声』で知られる歴史家バーバラ・タックマンは、その冒頭 4 章をドイツ、フランス、イギリス、ロシアの戦争計画の描写に費やしている。まず西部戦線でフランス、東部戦線でロシアとの対峙を余儀なくされるドイツで 1906 年に立案されたシュリーフェン計画は、戦争期間を 6 週間とし、当初目標をフランスの速やかな粉砕においていた。その根拠は、広大な国土と多くの人口を擁しながらも鉄道が少ないロシアは大攻撃開始までに 6 週間を要するのに比べ、ドイツもフランスも 2 週間あれば動員完了が可能で、5 日目には大攻撃戦を開始できたところにある。計画は、攻撃戦争にお

ける決戦での勝利を第一目標としたカール・フォン・クラウゼヴィッツの思想に強く影響されていた[12]。

これに対しフランスの戦争計画は、1913年10月に採用された「作戦要務令」冒頭の言葉「フランス軍はいまや古来の伝統に帰り、今後は攻撃以外の法則はこれを排す」に象徴されている[13]。それは1911年にグランメゾン大佐が陸軍大学で行った「司令部の決断はすべて、機先を制し、主導の地位を保持しようとする意欲から出たものでなければならない」という主張をもとにしており、フランスはそのおかれた地理的条件に相応する防衛計画を名実ともに放棄することになった。

他方イギリスでは、1910年8月に作戦本部長に就任したヘンリィ・ウィルソンのもとで、ベルギー国境におけるドイツの新しい鉄道建設の状態が調査されていた。その結果、ドイツが先にベルギーを侵害した場合にのみ、フランスは確実にイギリスの支援を受けることができるとする極秘のW計画が1914年に完成し、「介入反対の毛布ですっぽりと頭を隠した」政治指導者たちは、その監視を意図的に控えることになった。[14]

さらにロシアにとって、フランスとの同盟は自らの保有する広大な空間の活用よりもむしろ限られた時間に計画の重心を置くことを強いるものとなった。戦争勃発後のフランスの安全保障のためには、ロシアは東部戦線でドイツに一刻も早く攻勢をかけねばならず、作戦本部はオーストリアとドイツに対する二つの戦闘作戦を準備する[15]。『第一次世界大戦への道』の著者ウィリアム・マルガンによれば、「時間か空間かという選択が、日露戦争から1914年までのロシアの軍事計画を左右していた」が、この時間に重点を置く戦争計画は、財政の脆弱性や相対的な技術の後進性、ツァーリ体制の不安定性を抱えるロシアにとってきわめて「不快な選択肢」であった[16]。

こうして動員時間に基づいて戦争計画を策定したドイツ、攻撃戦争に集中し防衛計画を放棄したフランス、ドイツのベルギー侵攻後の自動参戦を約束したイギリス、そしてフランスのために時間を重視せざる得ないロシアは、それぞれが構築した戦争計画という時間フレームに強く拘束されていた。こ

のことをもっとも象徴的に示したのは、8月1日夜にベルリンで皇帝ウィルヘルム２世と参謀総長小モルトケのあいだに交わされた有名なやりとりであろう。すでに動員の歯車が回りだし、ドイツ軍が西進してルクセンブルグの鉄道連絡駅を占拠しようとする一時間前、ロシアに対する一正面作戦への期待を抱いた皇帝は全軍を東進させるように参謀総長に迫った。しかし、100万の兵員を前進寸前に逆方向に展開させることは、10分単位で構築された緻密な戦争計画の崩壊を意味する。モルトケは、「一度決定されたことは、変更してなりません」という言葉でウィルヘルムに応え、計画の変更をはっきりと拒否したのだった[17]。

この言葉を、タックマンは「軍事計画が政治を左右する場合にかならずつかわれる文句」と述べる。だがそれはまた、政策決定者が自らつくり出した時間フレームに抗いがたく拘束されることも示していた。なるほどポール・ピアソンは、『ポリティクス・イン・タイム――歴史・制度・社会分析』で、社会過程をあらためて時間の文脈のなかに置くことを主張している。しかし時間は、諸現象の背景や文脈にとどまるものでは決してない。むしろひとたびつくり出された時間フレームは、政策決定者に対してきわめて強力な「鉄の檻」として立ち現れる。このより強い意味で、政治過程はいつもすでに「時間のなかでの政治」なのである。

⑵　最後通牒をめぐる時間決定

もっとも、こうした「鉄の檻」としての時間フレームも、電信や電話、鉄道による外交ペースの変化がなければ、変更が可能であったかもしれない。『時間と空間の文化――1880年―1918年』の著者スティーブン・カーンは、7月23日から8月4日までに交付された最後通牒で設定された回答期限と列強が交わした電信・電話の時刻に注意を促している。

第一の最後通牒は、7月23日にオーストリアからセルビアにつきつけられた。そこではたった48時間での回答が求められるが、その理由は鉄道、電報、電話のある時代であれば、2、3時間もあれば大臣たちが集まるのに

十分だろうというオーストリア大使の言葉に示されていた。また第二の最後通牒は、7月31日午後7時にパリ駐在のドイツ大使からフランス政府に交付され、独露戦争においてフランスが中立を保つことを18時間以内に約束するように要求する。さらに同日夜12時には、ドイツはロシアに最後通牒を発し、オーストリア・ハンガリーとドイツに向けた動員中断を12時間以内に回答するように求めた。そして第四の最後通牒は8月2日午後7時にブリュッセル駐在のドイツ公使がベルギー政府に渡し、そこではドイツ軍の領土通過を静観するよう12時間以内の回答が要求された。そして翌朝のドイツによるベルギー侵攻後、8月3日午後7時にベルリン駐在のイギリス大使からドイツ政府に手渡された第五の最後通牒では、前日のベルギー政府への最後通牒を撤回し、ドイツ軍をベルギーから撤退するように5時間以内の回答が求められる。言うまでもなく、これらの最後通牒のうちのどれ一つとして、各国が求めた回答をもたらすことはなかった。

さらに2週間足らずの期間に頻発された最後通牒のはざまでは、まさに分単位での通信が交わされている。例えば、第一の最後通牒がつきつけられた翌日には、イギリス、ロシア、フランスの外交官たちはただちに電信を交わし、戦争回避のために回答の期限延長を訴えた。他方オーストリアとドイツは、セルビアの最後通牒拒否を予想して宣戦布告と軍事行動の準備を急ぎ、またより長い動員時間を必要とするロシアも予備的動員を開始する。その一方で、ドイツ皇帝ウィルヘルム2世といとこのロシア皇帝ニコライ2世は、29日午前1時45分から1日夜10時30分のあいだに少なくとも9本の電報を打っており、両君主が互いに戦争回避への支援を求めつつ動員圧力に屈していく様子が浮かび上がっていく。カーンの表現を借りれば、「ふたりの皇帝はたぶん、電信のキーがカタカタいう音に外交の死を聞いたことだろう[18]」。

こうして7月危機は、最後通牒のかたちをとる時間決定のもとで尖鋭化していった。48時間、18時間、12時間、そして最後には5時間にまで切り詰められた回答期限は、時間決定がいかに事態の推移に断層線を書き込むかを示している。そこで断ち切られた時間はそのまま外交交渉の断絶となり、時

間決定の重心は動員と戦争遂行へと傾いていった。むろんそのなかでも、回答期限の引き延ばしや速やかな動員準備、外交断絶と動員開始と宣戦布告の区別、そして君主たちの個人的絆を通じた鎮静化が試みられたものの、そのどれも全面戦争の回避はおろか、その限定にさえも成功しなかったのである。

この切り詰められた時間決定をもたらしたものは、オーストリア大使の言葉に示されているように、鉄道・電報・電話による移動・通信時間の縮減であった。19 世紀初頭まで、外交では「時間だけが調停者」とされていた。外交使節は、本国政府への報告と指示に要するゆるやかな時間のなかで事態の鎮静化を期待し、逆に通達に時間がかかることを利用して積極的な調整を展開した。かつてナポレオン戦争の戦後処理を担ったウィーン会議は、「会議は踊る、されど進まず」と揶揄される。だが高坂正堯が『古典外交の成熟と崩壊』で描き出したように、そこでは各国の妥協を引き出し、利害を具体的に限定して処理するために時間をかけることが必要不可欠だったのである[19]。

こうしてカーンは、7 月危機という同時性のドラマの結末を次のように表現する。

伝言が行き違いになる、打電が遅れる、不意打ち、予測できないタイミングなどによって、電信は外交の挫折を裏づけしたからである。あの危機の間において、電信より速い新たなスピードはひとつもなかったが、変動してやまぬ新しい速度はいくつもあって、それらによって大衆は熱狂し、外交官は混乱し、将軍たちは気力を萎えさせた。（カーン　1993：206）

鉄道・電信・電話といった技術革新は、たしかに時間フレームの操作性を向上させ、時間決定の有意性を増したかもしれない。しかしそこで生じた時間の短縮は、皮肉にも「タイミングの技術」としての外交の調整幅を狭め、第一次世界大戦は旧外交の崩壊として記憶されることになった。少なくとも 7 月危機において、電報や電話による新たな外交ペースは平和の維持より戦争の拡大を招いている。こうして最後通牒によって切り詰められていった回

答期限は、まさに「時間をめぐる政治」の尖鋭化の徴候を示していたのである。

３．戦後世界と時政学

⑴　高度経済成長と時間の収縮

もちろんこうした７月危機をめぐる時間政治の尖鋭化は、戦争前夜という例外状況に特有の現象であった。複雑な背景をもつ第一次世界大戦の原因を、戦争計画という時間フレームと最後通牒に象徴される時間決定にのみ帰すことはできないだろう。だがそこに露呈した時間の収縮は、やがて政策エリートたちの活動領域から溢れ出し、社会生活の基礎条件を変化させていく。この傾向をいちはやく国際政治の分析に組み込んだのが永井陽之助であった。1979 年に刊行された『時間の政治学』は、決して体系的な著作ではないものの、今日そこに時間をめぐる政治学的分析――時政学――の臨床例を読みとることは不可能ではない。

その第一論文で、永井はまず「経済秩序における成熟時間」をとりあげる。彼によれば、第二次世界大戦後、労働者一人当たりに投入される資本量は急速に上昇し、労働生産性の上昇は加速化した。だが生産性の向上が労働時間を短縮し、節約された時間が自由な文化的時間になるというケインズの予見は見事に裏切られる。むしろ効率と経済合理性の観点は人々の生活時間にまで浸透し、賃金・賃貸料・利子・預金・減価償却費、保険料等、「同質的な時間単位で価値を配分し、「貨幣価値で時間を測る」ことが当然となった（永井　1979：6）」。

ところが、こうした「時間の貨幣化」は、人間の有機的生成に必要な時間フレームと必ずしも相容れない。永井のみるところでは、子育てや教育、教養や恋愛といった文化的活動には、いずれもある程度の成熟時間が必要である。だがこれら時間を要する活動は、単位時間あたりの生産性向上が至上命題となる社会では贅沢な浪費とならざるをえない。テクノロジーの発達と高度経済成長のもとで情報空間が広がる一方、人々の成熟時間はいっそうの短

縮を求められる。この空間拡大と時間収縮について、永井は次のように表現した。

世界全体が「地球社会」として網の目のように、緊密な相互依存のシステムにかたちづくられるにつれて、時間はますます短縮した。その結果、われわれ現代人は、時間パースペクティブのごくせまい、一種の「時間近視」にかかっている。われわれは、「順を追って成熟する暇がない」のである。（永井　1979：8）

こうして市民生活の内部にまで浸透した時間収縮は、新たな時間フレームとして人びとの生活を枠づけていく。生産性の向上を追求することで成立した地球社会は、逆説的にもミクロ・レベルで人々の時間の地平を狭めることになった。

そしてこの時間収縮は、マクロ・レベルでは戦争目的を空間から時間へと転換する。永井によれば、この変化がもっとも顕著にあらわれたのが資源獲得をめぐる競争であった。

かつての資源戦争は、本質的に空間的な闘争であったが、現代のそれは、時間的闘争である。「ローマ・クラブ」の未来予測の当否は別として、われわれ人間の意識のうえに地球資源の時限性があきらかに刻印されてしまった以上、現代の国際政治は、いわば時限爆弾つき「宇宙船地球号」内部の「持ち時間つきゲーム」に一変した。そのことは、政治と外交へかつてないほど速度を持ち込むことになった。（永井　1979：9）

1972 年にローマ・クラブが発表した『成長の限界』は、グローバルなシステム・モデルによって食糧不足や資源の枯渇、汚染の増大を予測し、50 年から 100 年以内に破滅的結果が発生すると警告した。つまりそこでは、人口増加率と経済成長率に基づいて新たな時間フレームが設定され、起こりう

る未来の破局を引用することで先進諸国に速やかな政策決定が求められたのである。その際に重要となったのは、省エネルギーやリサイクル、新たな資源開発による「時間の引きのばし」という時間決定であった。

こうした時間分析によれば、時間政治はもはや例外状況に特有のものではない。単位時間あたりの労働生産性の向上が加速するにつれ、ミクロ／マクロ・レベルの双方で時間はますます稀少な資源となる。一方でそれは人々の成熟時間の腐食をもたらし、他方でそれは資源戦争を時間をめぐる闘争へと置き換えていく。この時間収縮を範型とする新たな時間フレームこそ、グローバルな経済秩序のマトリックスだったのである。

⑵　新たなる時間戦争

さらに、この時期に生じた戦争目的の転換は、従来までの時空概念に大きな修正を迫るものであった。永井と同時期、すでに時政学という言葉を用いていたポール・ヴィリリオは、1977 年の『速度と政治』で次のように述べる。

かつて土地を譲って時を稼ぐことを本領とした機動は、今日、まったく意味のないもののなってしまった。現在、時を稼ぐのはもっぱらミサイルや砲の仕事であり、領土は射出体のためにその様々な意味を失っている。実際、速度の非―場所性のもつ戦略的価値が場所の価値に取って代わり、時の取得問題が領土の所有問題の性格を一変してしまった。（ヴィリリオ　2001：192）

この視点からすると、1962 年のキューバ危機はすでに時間をめぐる攻防であった。キューバへのミサイル配備は、超大国間の戦争予告の猶予を 15 分から 30 秒に短縮する。第一次世界大戦ではまだ数日間の猶予があった開戦までの時間フレームは、ミサイルの登場によって分・秒単位にまで収縮していた。

これに対して、10 月 22 日午後 7 時にジョン・F・ケネディ大統領がテレ

ビ演説で発表した海上封鎖は、キューバ攻撃までの猶予をもたらし、外交交渉が可能な5日間という時間を創り出した[20]。つまりこの政策決定は、事実上、時間決定として機能したのである。ワシントン時間10月28日午前9時、ニキータ・フルシチョフ首相はモスクワ放送でミサイル撤去の決定を発表する。「空間戦争の戒厳令から時間戦争の緊急事態へ（ヴィリリオ　2001：200）」。彼らが即時性のあるテレビやラジオ放送でその決定を全世界に伝えたことは、いまや時間資源が超大国の指導者にとっても、また諸国民にとっても等しく稀少資源となったことを物語っていた。

ただし、こうした危機回避の奇跡は、全面核戦争を目前にした米ソの時間資源がある程度均衡していたために成立したとも言える。これに比べベトナム戦争やアルジェリア戦争といった非対称紛争では、工業・技術社会を基盤とする大都市勢力が前近代的な農業生産を基盤とする土着の解放勢力に敗れるという事態が生じてくる。永井によれば、「それは、常識的な意味での軍事的「能力」の闘争から、「意志」の闘争への転換を意味するものであり、「能力」の闘争が基本的に空間的量的闘争であるのに対して、「意志」の闘争は、そのシステムのもつ持久力――「時間」によって測られる犠牲（代価）の大きさで決定される紛争（永井　1979：60）」であることに起因していた。

ここで注目するべきは、工業社会と農耕社会のそれぞれが保有する時間資源――待忍能力――の非対称性である。一方で、工学的な近代戦は集中性・計画性・非日常性を追求し、破壊力と機動性の効果・効率を高めてきた。そこには、情報公開や世論、選挙等の時間フレームのもとで資本・情報・技術が集中していく工業社会の時間フレームが反映されている。他方、原始的ともいえるゲリラ戦では、むしろ拡散性・即興性・日常性が重要である。伝統的な農耕社会を枠づけるゆるやかな時間感覚や中央集権を拒むアメーバ状の組織文化は、ときに犠牲を許容する吸収装置（absorber）となった。このため、そもそも軍事的勝利が望めない現地勢力にとっては、「敵が倦みつかれて撤退し、「熟柿が落ちる」のを待つという「時熟の戦略」がその根本（永井　1979：80）」となる。そこで賭け金となるのは、時間に換算された意志――

犠牲にいつまで耐えられるか――である。永井にとって、ベトナム戦争は強大な先進諸国の能力と意志に時限性という脆弱性が組み込まれていることが露呈した事件だったのである。

さらにヴィリリオは、こうしたベトナム戦争の意義を認めつつ、パレスチナ問題をめぐる闘争に時間をめぐる戦争のさらなる尖鋭化を見出している[21]。

というのも、彼らの闘争の原因自体が、ほかでもない、地理的領土の喪失だったのだ。彼らは早晩、文字通り世界中の空港という同一標準時地帯に身を落ち着けることになるだろう。どこからともなくやって来た無名兵士たちが、飛行時間の相対性の中にある戦略的時間の中で戦うのだ。（ヴィリリオ 2001：180）

ベトナム戦争においては、時間をめぐる戦争はなおも植民地化された領土を舞台に展開されていた。しかしこの時期にパレスチナ過激派が引き起こす数々のハイジャック事件は、もはや特定の空間に根ざしていない。法的・政治的領土を喪失したパレスチナ人は、航空機や国際空港の滑走路といった「移動の空間」でその闘争を展開し、世界の注目を惹きつけようとする。それは事実上、地理的空間の占拠から人々の関心を引く時間の占拠への戦略転換を意味していた。時政学の観点からみれば、時間戦争はただ時間資源の稀少化にともなって尖鋭化しただけではない。むしろそれは異なる時間フレームのあいだの摩擦と、時間決定のイニシアティブをめぐる闘争として生じるようになったのである。

４．世界秩序の時間論的転回

⑴　時間秩序としてのウェストファリア・システム

こうした時間政治の変容を、すでに永井は「ウェストファリア体制の時空

構造」の崩壊と捉えていた[22]。彼によれば、三十年戦争の惨禍から生み落とされた近代国際システムは、血なまぐさい宗教戦争や内戦を克服し、はじめて国家を主体とする戦争の制度化に成功していた。その勢力均衡システムが作動するためには、紛争の範囲を限定したり局地化したりする「空間的緩衝地帯」と、潜在的資源を戦力として動員するまでの「時間的冗長性」が重要である。一方で、「動かしうる空間」としての国境や勢力圏、フロンティアは、列強間の戦争を承認された競争にとどめる緩衝装置として機能した。他方、保有資源を戦力へ実体化するのに必要な所要時間は、外交交渉を展開する時間的余裕をもたらし、戦争が不可避な場合も宣戦布告による平時と戦時の分節化を可能にする。この「時間の遅れをともなったフィードバック」の重要性について、永井は次のように書き残している。

政治および経済の秩序において、一般にその制度（秩序）の権威、信用、といった象徴的部分は、その背後にひそむ実物過程との微妙な対応関係によってからくも支えられており、それは“時間”の問題と深く関わっている……つまり、秩序における象徴過程と実物過程の相互作用には、“時間のおくれ”（間欠性、周期性）が必要なのである。たとえば、一国の政府当局の権威が確立され、秩序が保持されているのは、反政府勢力の革命勢力や叛徒が全国のすべての交番や警察、軍隊の所在地を同時に襲うことによって、各拠点の実力を試すことが不可能だという事実によって担保されている…（永井　1979：101）

戦争システムとしてのウェストファリア体制もまた、この“時間の遅れ”を組み込んだ秩序のひとつである。それは必ずしも列強間の戦争を抑止しなかったが、空間的緩衝地帯と時間的冗長性によってシステムの「揺らぎ fluctuation」を吸収する動的均衡を特徴としていた。いわばウェストファリア・システムとは、時差を前提とする時間フレームと柔軟な時間決定をもたらす外交術（art）によってかたちづくられた時間秩序だったのである。

この時間秩序という観点からみれば、7月危機のなかで立ち現れた新たな時間フレームと時間決定は、すでにウェストファリア・システムの「終わりの始まり」を意味していた。すなわちそこでは、鉄道の時刻表によって管理された戦争計画の硬直性が鉄の檻となり、また電話と電信がもたらす通信の同時性が外交術からその好機を奪っていく。こうしたヨーロッパ秩序の崩壊を、ヘンリー・キッシンジャーは次のように描き出している。

万華鏡のようにめまぐるしく変わるヨーロッパの秩序で、こうした再編成が何度か起きた。そこには制度が硬直化するという、これまでにない特徴があった。外交は柔軟性を失った。漸進的に調整するのではなく、生死の問題になった……外交は自分たちの陣営の結束を強めるための活動になり、すべての不平不満がいつまでも消えることなくつのっていった。(キッシンジャー2016：94)

移動の加速化と通信の同時化がもたらす時間収縮は、こうして成熟や調整に必要な時間的冗長性の喪失へと行き着く。それはまた、時間秩序としてのウェストファリア・システムの維持が、すでに20世紀初頭には困難になりつつあったことを暗示していた。

⑵　歴史的時間の復権

ところが、こうした時間秩序の変質は、冷戦終結まで必ずしも十分に分析されなかった。2008年に『時間と世界政治――現在を考える』を刊行したキンバリー・ハッチングスによれば、1945年から1989年の間、国際関係論は明らかに時間よりも空間に心を奪われていた。その理由の一つは、冷戦期に主流となった研究がきわめて静態的だったところにある。

ケネス・ウォルツのネオ・リアリズムの理論構成にも顕著なように、そこでは国際システムの力学が大きく変化する可能性よりも、異なる複数のパワーの空間的配置こそが関心の的であった。「言い換えれば、国内の政治

空間はこれまでもこれからも変化しうると考えられたのとは対照的に、国際政治の空間は時間のなかで凍りついてしまっていたのである。（Hutchings 2008:11）」

振り返れば、国際関係の理論家たちにとって、国際政治学の「空間化 spatialisation」は、17 世紀に成立したウェストファリアの平和にまでさかのぼる自明の前提であった。すなわち、近代ヨーロッパでかたちづくられた対内主権と対外主権の区分は、国際関係それ自体を空間表象に強く結び付けてきたのである。しかもこの特殊ヨーロッパ的な想定は、第二次世界大戦と戦後の脱植民地化を通じて、アジアやアフリカも含む世界中に拡大したものと考えられていた。

それゆえハッチングスも指摘するように、国際政治学における時間の再発見が冷戦時に「歴史の終わり」として提示されたことは象徴的である。1989 年、フランシス・フクヤマは、「わたしたちが立ち会っているのは、歴史の終わりであり、たんに冷戦の終わりとか戦後史の特定の時期が過ぎ去ったとかいうことではない。それは人間のイデオロギー的な発展の終点であり、人間による政治の最終形態として西側のリベラルな民主主義が普遍化していくことを意味している（Fukuyama 1989:4）」と喝破した。それはまさに、冷戦後の国際政治の位置確認の手段として、普遍史的なパースペクティブを復権する試みだったのである。なるほど、この普遍史という時間フレームの設定と、現在こそ「歴史の終わり」とする時間決定は、冷戦後の世界政治において先進国の優位を保証する役割を果たした。そこでは、歴史化された時間フレームの設定それ自体が、資本主義と民主主義の優越性を確認するための重要な装置となったのである。

また、こうした位置確認の手段としての歴史的時間フレームの復権は、EU 理事会で対外・政治軍事問題担当事務局長を務め、リベラル帝国主義を掲げたロバート・クーパーの世界観からも読み取れる。彼によると、現代世界はポスト帝国主義的なカオスを特徴とするプレ近代世界、古典的な国家システムが残っている近代世界、そして国家システムより規模の大きな秩序のもとで内政と外交の区別が融解していくポスト近代の世界に分裂している。

クーパーは、「ヨーロッパは、軍事力では衰えたかもしれないが、模範を示す力はまだ残っている。その力こそ、ポスト近代における帝国主義と言えよう（クーパー　2008：76）」と述べ、ポスト近代の旗手であるヨーロッパの道義的優位を主張したのだった。

さらに、新たな時間フレームの設定と現在位置をめぐる時間決定とは、近年では「ポスト・アメリカ」（Zakaria 2008）という言説形態をとっている。ファリード・ザカリアによれば、現代は 15 世紀以降のヨーロッパの台頭、19 世紀末のアメリカ合衆国の台頭に続く第三の権力シフト、すなわちその他の国の台頭の時代である。この全地球的成長のなかで、あらゆる国家が参加する真の世界経済が誕生し、権力は国家から別のアクター――国際機関、企業、テロ組織等――へ拡散する。このように「アメリカ時代の終わり」という歴史化された言説もまた、明らかに時間フレームと時間決定の政治性によって刻印されているのである。

５．収縮／断片化する時間地平

⑴　グローバリゼーションと「空間の時間化」

こうして、冷戦の終結はあらためて時代区分による現在位置の確認欲求を解凍し、結果的に歴史的時間が復権されることになった。ただしそれが「歴史の終わり」であれ「ポスト近代」であれ、あるいはまた「アメリカ後」であろうとも、国際政治学の思考法は近代的なクロック・タイムの線形性を越えていくことはなかった。なるほど頻発される「～の終わり」や「ポスト～」といった表象は、いずれも直線的で不可逆的な時間を前提としており、実のところ名状しがたい事態の到来への焦燥を映しだしている。むしろ新たな時間条件とその政治的インパクトは、この時期に活性化したグローバリゼーションをめぐる議論のなかで検討されていく。

この点では、地理学者デヴィッド・ハーヴェイの時空間分析はきわめて先駆的であった。彼によると、20 世紀末の産業組織では、従来までのスケー

ルメリットを重視する硬直的なフォーディズムとは反対に、フレキシブルな蓄積が採用されてきた。そこでは多様な商品をスモールバッチで安価に製造する一方で、生産とそれに対応する消費における回転期間を加速することで資本蓄積が達成される。彼にとって、ここに生じる時間 - 空間の圧縮こそ、ポストモダニティの条件であった。

空間は電子通信の「地球村」、経済的または生態学的に相互依存した「宇宙船地球号」へと収縮しているようである。さらに存在するのは現在ばかり（分裂症者の世界）という点にまで時間的地平が縮められるにつれ、われわれの空間的、時間的な諸世界が「圧縮」しているという圧倒的な感覚にたいして、いかにわれわれは対処するのかを学ばなければならない。（ハーヴェイ　1999：308）

15 世紀から 19 世紀半ばまで、馬車と電車の最高時速は平均 10 マイル、19 世紀半ばから 1930 年代の蒸気機関車の平均時速は 65 マイル、また 1950 年代のプロペラ機は平均時速 300―400 マイル、そして 1960 年代までにはジェット旅客機の平均速度は 500―700 マイルに達していた。これら交通手段の加速化は、もちろん地球を物理的に圧縮するわけではない。それは、移動距離に対する所要時間の短縮というかたちで経験される。グローバリゼーションをめぐる言説では、しばしば「地球が小さくなった」と表現されるが、実のところ、そこに生じているのは移動時間の短縮にほかならない。

また 1970 年代初頭から用いられた衛星通信では、5000 マイルも 500 マイルも通信コストは同じになり、遠く離れた様々な空間から押し寄せるイメージがほぼ同時的に経験可能となる。こうしていまや、移動・通信手段の加速に基づくグローバリゼーションは、たんなる空間の圧縮や情報空間の拡大ではなく、事実上「時間による空間の絶滅」であることが明らかになる。そこに生じる「空間の時間化」は、いわば空間表象と固く結びついたグローバリゼーショの背後で、むしろ時間論的転回（Temporal Turn）をもたらしていた。

⑵　瞬間的時間の政治的インパクト

さらにジョン・アーリは、2000年に著した『社会を越える社会学』において、1970年代以降の情報社会の特徴を検討し、そこに電子情報が生み出す「無時間的な時間」を見出している。すなわち、電子化された情報は、「瞬間的・同時的に」「事実上どこでも」入手できるため、そこに「瞬間的時間」という新たな時間フレームが生じてくる。電子的な情報システムによって極限まで短縮された通信時間は、いまや次のような特徴をもつ。

① 完全に人間の意識を越えてしまう、想像も及ばない短い期間を基底とした情報や通信の新たなテクノロジー。
② 別々の瞬間に起こる原因と結果の時間的分離を特徴とするクロック・タイムの線形的論理に代わって生まれている、社会的、技術的関係の同時的性格
③ 文字通りに瞬間的、同時的でないにしても、ひどく短期的、断片的な時間のもつ幅広い意味を表わすメタファーとしての性格（アーリ 2006：223）

新たに出現した瞬間的時間は、情報や観念の瞬時の伝達のもとで、かつての昼と夜、家庭と職場、余暇と仕事といった時間区分を融解させ、併せて流行やイメージの不安定化・短命化をもたらす。またそこでは、製品、場所、人間関係の「一時性」が広がるとともに、短期労働契約の増加、生活のペースの加速と政治的選好の不動性の高まりなども引き起こされていく。アーリの言葉では、「要するに、現代のテクノロジーと社会的営為は、意識的な人間の経験を越えた時間の枠組みを基にしているのだ（アーリ　2006：222）」。

そして彼によれば、この瞬間的時間は、近代国家の統治機構さえも凌ぐ政治的インパクトをもっていた。冷戦終結後、東欧で同時多発的に生じた革命の原因も、時間の加速化に求められる。

こうした国々は、近代主義的なクロック・タイムから逃れられず、流行、イメージ、マイクロ・コンピュータの瞬時性と、それに並行する空間の変容とに対応できなかったのだ。東欧社会は、時間のゆがみ、つまりクロック・タイムを軸にした強制的な近代化に縛られていたのである……一方で、その四方一帯では時間の転換が生じており、次第にそれは国境を縦横するものとなった。その結果、近代主義的なクロック・タイムを持った陸の孤島は従来のやり方を続けるのが不可能になったのである。（アーリ　2006：228）

彼からみれば、いまや瞬間的時間にまで加速した時間は、硬直的な時間フレームによって支えられていた東欧諸国の政治体制を崩壊させるのに十分な政治的インパクトを持っていた。それは言い換えれば、これまでの政治学／国際政治学が自明視してきた近代的時間――クロック・タイム――に基づく統治がもはや時代遅れになったことを意味する。

しかも今日では、これらの近代的時間に基づく統治の破綻は、共産主義政権や計画経済に特有のものではない。2008 年に拡大した世界金融危機や、2010 年代初頭に SNS を通じて拡散したアラブの春、ほぼ同時期に世界同時デモを具現したオキュパイ運動等、世界や地域に瞬時にして広がる政治・経済変動は､いずれもこの瞬間的時間をその時間フレームとしている。それは、各主権国家のあいだの時間的冗長性を前提としていた「国際政治」から、瞬間的時間の共有をマトリックスとする「世界政治」への移行を示唆していた。

６．時間統治の行方

⑴　国民国家システムと時間的境界

こうして、第一次世界大戦前夜から第二次世界大戦後を経て、冷戦終結以降のグローバリゼーションの時代にまでいたる時間フレーム／時間決定の変容は、これまで近代的なクロック・タイムを自明視してきた国民国家システ

ムに根本的な問い直しを迫る。

『時間の政治的価値――シティズンシップ、期間、民主的正義』（2018年）の著者エリザベス・コーヘンによれば、日付や期限を区切る時間的境界（temporal boundaries）は、ときにフェンスや武装警備兵を配した地理的境界よりもはるかに苛酷な政治的・統制的機能を発揮してきた。第一に、時間的境界は主権が打ち立てられた端緒、つまり国家の政治的生命の始まりを示すことで国家体制や政治的権威を確立する。第二に、それは人々に過去を反復させることによって異なる国民同士を引き離す。第三に、それはまた国民国家内部の人々を臨時的移住者、永住者、完全な市民権保持者に分断する。そして第四に、時間的境界は年齢制限や在住期間の規程を通じて人々の投票権を制限する。

つまりこれまで国民国家は、時間決定によって、①主権を確立する境界、②諸国民を隔離する境界、③国家内部で人々の自由を規制する境界、④国家内部で権利を持つ者と持たない者を区分する境界　を創り出してきた。これら時間的境界の機能について、コーヘンはこう述べる。

市民を民族的構成へとかたちづくり、誰が投票するのかを統制し、国民をかつてのかたちに回帰させるために、時間的境界は人々に課せられる。時間は国家にとってと同様、国民にとってもなくてはならないものであり、時間的境界は人種と民族性をめぐるナショナリストの偏見を感染させる。諸国家の内部を横切る時間的境界の多くの例は、構造的なマイノリティを意図的または効果的に抑制したり、排除したりしてきたことを示している。（Cohen 2018:61）

もちろんこの時間的境界は空間的・地理的境界のように視認できるわけではない。だがそれは､日付や期限をめぐる時間決定を通じて人々を分断する。このとき時間的境界は、ほかでもなく時間フレーム＝時間の流れと時間決定＝時間の調整との再帰性のもとで画定されていく。すなわち時間的境界は、

空間的境界と並んで国民国家システムそれ自体を構成する役割を果たしてきたのである。

⑵　未熟な正統性

こうして今日では、地球社会の成立とともに進行してきた時間収縮は、しばしば瞬間的時間への断片化にまで達するようになった。そこでは時間フレームはますます短縮され、時間決定と区別がつかなくなる。言い換えれば、そこでは時間フレームと時間決定の再帰性のサイクルがますます加速していくのである。この根源的な時間変容のなかで、時間をいかに統治するかという問題があらためて立ち現れてくる。

こうしたなか、アーリは時間をコントロールする力を「時間統治力 time sovereignty」と呼んでいる。みずからの時間をどの程度コントロールできるか、あるいはフレキシビリティを備えているかという時間統治の可能性は、ミクロ／マクロ・レベルの双方で死活的な重要性をもつようになった。「「社会的に排除された」人々のなかには、多くの時間的資源（したがって高いフレキシビリティ）を手にしている人もいるが、低賃金労働者も見られ、そうした人の場合、時間厳守の圧力が「時間統治力」を弱め、時間に合わせることが非常に重要になっている（アーリ　2015：285）」。ここに見出されるのは、時間資源の稀少性がますます高まるなかで、時間厳守や時間短縮といった圧力が時間統治力をさらに弱めていくというスパイラルにほかならない。

そのため時間政治をめぐる現代特有の課題について、ハルムート・ローザは「政治的時間の逆説」を指摘する。彼によれば、多元的で民主的な社会では正当な政治的決定のためには相応の時間が必要とされる一方で、政治的決定が対処するべき経済問題や技術発展はますます時間の短縮を要求するようになっていく。この矛盾した要求のはざまで、政治システムはしばしば機能不全に陥り、その決定権を法的決定や経済動向、技術的発展といったより「迅速な」他のシステムに譲り渡してしまうのである[23]。

なるほどすでに永井が慨嘆していたように、新たな時間フレームとしての

瞬間的時間は、

成熟時間の喪失を推し進める。いまや、2005 年には『フラット化する世界』でグローバリゼーションを礼賛していたトーマス･フリードマンでさえ、2007 年以降の変化の加速を「あまりにも速すぎる」と表現していることは象徴的であろう。彼は、2011 年にエジプトでムバラク大統領の独裁を終わらせたエジプト革命や 2014 年に数か月にわたって当局に抵抗した香港反政府デモのリーダーを取材し、彼らの呼びかけが瞬く間に多くの人々に拡散して巨大な政治運動に発展した一方で、何故、民主化という目的を達成できなかったのかを探っている。

例えばエジプトでは、人々を集合させたソーシャル・メディアは、その後に「総意」をまとめることができずに政治闘争が激しく分極化した結果、政変はイスラム原理主義の台頭や軍部の政権掌握を招くことになった。また香港の雨傘運動では、当局に対抗する幅広い同盟を生み出す信頼や人脈が構築されておらず､数か月の道路占拠は警察による排除という結末を迎えていた。このことから、フリードマンは加速の時代の地政学的変化を次のように述べる。

ソーシャル・ネットワーク、安価な携帯電話、メッセージング・アプリは、共同行動を容易にするとともに、それを妨げた。人々が水平的に結びつくことが容易になり、効果的になったが、底辺の人間が頂点の人間を――相手が敵であっても、味方であっても――ひきずりおろすのも、安易になり効果的になった……ソーシャル・メディアは、意見の共有にはうってつけだが、共同で打ち立てるのには向かない。共同で破壊するのは得意だが、共同で建設するのは苦手かもしれない。フラッシュモブを集めるのにはすばらしい力を発揮するが､政党や憲法を基盤にすばやく合意をまとめるのは上手ではない。（フリードマン　2018：51）

こうして、時間フレームと時間決定の融合から生じる瞬間的時間は、即座

に人々に拡散して幅広い共同行動を可能にする一方で、持続可能でレジリエンスの高い合意を育むことには必ずしも成功してこなかった。少なくともいまのところ、それは政治社会における正統性を掘り崩すことはできても、新たな正統性を創り出すことはできていない。この点では、ポスト・グローバリゼーション時代の政治課題は、瞬間的時間という新たな時間フレームのもとで、いかに正統性の構築が可能かという問題を提起するのである。

むすびにかえて

以上、本稿では、これまで必ずしも十分には検討されていなかった時間政治の変容に注目し、時間フレームと時間決定というたがいに再帰的な二つの観点から、時間の政治社会学の可能性を浮かび上がらせてきた。

そこから明らかになったように、第一次世界大戦のなかで尖鋭化した近代的な時間政治は、すでに第二次世界後の高度経済成長や新たなる時間戦争のもとで変容し始めていた。実のところ、近代的主権国家システム――ウェストファリア体制――自体が、すでに時間的冗長性を前提とした動的均衡を志向する国際秩序であったが、冷戦後の世界で要請された歴史的時間の復権は、あらためて時間フレームと時間決定の政治性を浮かび上がらせている。もっとも、現代のグローバリゼーションの進行とともに、望むと望まざるとに関わらず、時間の地平は収縮／断片化しつつある。こうした根源的な時間条件の変容とともに、あらためて時間統治の行方が「未熟な正統性」問題として前景化してくるのである。こうしたなか、近代的な時間概念を自明視してきた政治社会学の思考法もまた、国民国家システムを支える正統性のあり方を問い直さざるをえない。

その意味では、2017 年 10 月にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで研究カンファレンス「時間と国際政治」が開催されたことは象徴的である。そこでは、あらためて時間への注目が国際政治学それ自体の問い直しと結びつけられ、時間論的転回に対しても批判的な検討が加えられた[24]。それはもしかすると、これまで空間表象によって概念化されてきた「国際政治」から、新たに時間表象のもとで結びつけられた「世界政治」への一歩になるかもしれない。

この点において、時間の政治社会学という研究アプローチは、わたしたちが埋め込まれた時空間の認識枠組みそれ自体を再審するよう要求しているのである。

本稿は、高橋良輔「時政学の射程――国際政治学の時間論的転回に向けて」（葛谷彩・芝崎厚士（編）『「国際政治学」は終わったのか』ナカニシヤ出版、2018年、所収）に大幅に加筆・修正したものであり、科学研究費助成事業　挑戦的萌芽研究「時政学の構築―“政治的資源としての時間”の解明―」（課題番号15K12990）の成果の一部である。

参考文献

Cohen, F. Elizabeth（2018）*The Political Value of Time: Citizenship, Duration, and Democratic Justice*, Cambridge University Press.

Fioretos, Ofero ed.（2017）*International Politics and Institutions in Time*, Oxford University Press.

Fukuyama, Francis（1989）“The End of History?”in The *National Interest*, 16（1989）.

Hom, Andrew R.（2018）“Silent Order: the Temporal Turn in Critical International Relations,”in *Millenium*, Volune46 Issue3, June 2018, pp.303-330.

Hutchings, Kimberly（2008）*Time and World Politics: Thinking the Present*, Manchester University Press.

Hutchings, Kimberly（2018）“Time and the Study of World Politics,”in *Millenium*, Volune46 Issue3, June 2018, pp.253-258.

Kissinger, Henry（2014）*World Order: Reflections on the Character of Nations and the Course of History*, Allen Lane.

Rosa, Hartmut（2009）Rosa,“Social Acceleration: Ethical and Political consequences of a Desynchronized High-Speed Society”in Rosa Hartmut and William E. Sheuerman ed.（2009）*High Speed Society: Social Acceleration, Power, and Modernity*, The Pennsylvania State University Press, pp.77-111.

Bertrand, Sarah, Kerry Goettlich, and Christopher Murray,（2018）“The Politics of Time in International Relations,”in *Millenium*, Volune46 Issue3, June 2018, pp.251-252.

Scheuerman, William E.（2004）*Liberal Democracy and the Social Acceleration of Time*, The Johns Hopkins University Press.

Zakaria, Fareed（2008）*The Post-American World*, W.W. Norton.

アダム、バーバラ（1997）『時間と社会理論』（伊藤誓・磯山甚一訳）、法政大学出版局。
アーリ、ジョン（2000）『社会を越える社会学』（吉原直樹訳）、法政大学出版局。
アーリ、ジョン（2015）『モビリティーズ――移動の社会学』（吉原直樹・伊藤嘉高訳）、作品社。
アリソン、グレアム＆フィリップ・ゼリコウ（2016）『決定の本質――キューバ・ミサイル危機の分析　Ⅱ』（漆島稔訳）日経 BP 社。
ヴァレリー、ポール（1980）「時間」『ヴァレリー全集　カイエ篇　4――身体と身体・精神・外界／感性／記憶／時間』（佐々木明訳）、筑摩書房。
ヴィリリオ、ポール（2001）『速度と政治――地政学から時政学へ』（市田良彦訳）平凡社ライブラリー。
ヴィリリオ、ポール（2007）『民衆防衛とエコロジー闘争』（河村一郎、澤里岳史訳）月曜社。
ヴェーバー、マックス（1980）『職業としての政治』（脇圭平訳）、岩波文庫。
エリアス、ノルベルト（1996）『時間について』（井本晌二・青木誠之訳）、法政大学出版局。
カーン、スティーブン（1993）『時間の文化史――時間と空間の文化 1880 － 1918 年　上巻』（浅野敏夫訳）、法政大学出版局。
カーン、スティーブン（1993）『空間の文化史――時間と空間の文化 1880 － 1918 年　下巻』（浅野敏夫・久郷丈夫訳）、法政大学出版局。
カント、イマニュエル（1961）『純粋理性批判　上』（篠田英雄訳）、岩波文庫。
クーパー、ロバート（2008）『国家の崩壊――新リベラル帝国主義と世界秩序』（北沢格訳）日本経済評論社。
高坂正堯（2012）『古典外交の成熟と崩壊　Ⅰ』中公クラシックス
タックマン、バーバラ（2017）『8 月の砲声　上』（山室まりや訳）、ちくま学芸文庫。
永井陽之助（1979）『時間の政治学』、中央公論社。
ハイデッガー、マルティン（1994）『存在と時間　下』（細谷貞雄訳）、ちくま学芸文庫。
バーク、エドマンド（2000）『フランス革命についての省察　上』（中野好之訳）、岩波文庫。
ハーヴェイ、デヴィッド（1999）『ポストモダニティの条件』（吉原直樹監訳）、青木書店。
ピアソン、ポール（2010）『ポリティクス・イン・タイム――歴史・制度・社会分析』（粕谷裕子監訳）勁草書房。
フリードマン、トーマス（2018）『遅刻してくれて、ありがとう――常識が通じない時代の生き方　下』（伏見威蕃訳）日本経済新聞出版社。
プルースト、マルセル（1996）『失われた時を求めて　第 1 篇　スワン家のほうへⅠ』（鈴木道彦訳）、集英社。
プルースト、マルセル（2001）『失われた時を求めて　第 7 篇　見出された時Ⅱ』（鈴木道彦訳）、集英社。
ベルクソン、アンリ（2001）『時間と自由』（中村文郎訳）、岩波文庫。
真木悠介（2003）『時間の比較社会学』岩波現代文庫。
マリガン、ウィリアム（2017）『第一次世界大戦への道――破局は避けられなかったのか』（赤木完爾・今野茂充訳）慶應義塾大学出版会。

マン、トーマス（1988）『魔の山　上』（関康祐・望月市恵訳）、岩波文庫。
ロッスム、ゲルハルト・ドールン - ファン（1999）『時間の歴史――近代の時間秩序の誕生』（藤田幸一郎・篠原敏昭・岩波敦子訳）大月書店。

（Endnotes）

1 同作の監督新海誠は、2002 年の劇場公開作品『ほしのこえ』から、ほぼ一貫して登場人物のあいだでの空間的距離／時間的距離／社会的距離の重なりやねじれを描いている。自我同一性という心理学的概念が自己の内面に遡行するのとは反対に、そこでは登場人物は空間的位置・時間的位置・社会的位置（アイデンティティ）という三つの座標軸によって自己確認を行っていく。
2（エリアス　1996：40）
3（カント　1961：97）
4 例えば（真木　2003）は、時間意識について、原始共同体の反復的時間、ヘブライズムの線分的時間、ヘレニズムの円環的時間、近代社会の直線的時間を区別している。
5（ロッスム　1999：217）
6（ベルクソン　2001：276）
7（ハイデッガー　1994：214）
8（エリアス　1996：4）
9（バーク　2000：：61）
10（ヴェーバー　1980：84）
11（アダム　1997：167）
12（タックマン　2017：62）
13（タックマン　2017：91）
14（タックマン　2017：135）
15（タックマン　2017：156）
16（マリガン　2017：152）
17（タックマン　2017：181）
18（カーン　1993：206）
19（高坂　2012：198）　また高坂は、ウィーン会議を主宰したメッテルニッヒが「最後通牒」を嫌悪していたことを指摘している。「たとえ自己の立場を強く主張することが必要であっても、『最後通牒』という形で、時間を切り、急いで問題の解決を図ることは粗暴であり、愚かであると彼は考えていたのだった。」（高坂　2012：199）
20（アリソン、ゼリコウ　2016：336）
21（ヴィリリオ　2007：51 － 55）
22（永井　1979：89）
23（Rosa　2008:104-107.）なお、社会的加速と民主主義の関係については（Scheuerman　2004）

24（Bertrand, Goettlich, and Murray 2018）時間論的転回に関する批判的検討として、（Hutchings 2018）および（Hom 2018）